



Card Seek ブロマガ(Vol.6)

2012 年 3 月 29 日 号

「不思議な出会い」

小河 俊 紀

世の中には、不思議な出会いというものがある。最近の体験は、その類だ。

それは、寒風の吹き荒ぶある日の夕方だった。私は、都内で会議を済ませ、近くの蕎麦屋で古い知人と落ち合い、いつものように蕎麦焼酎を酌み交わした。



その古い友人とは、42歳の時から公私にわたって縁があるHさんだ。某有名銀行の支店長経験もあり、8歳年上なのに、偉ぶることもなく、現役当時もリタイアした今も、いつも飄々としている。実は、この方との縁も不思議だらけだが、それは、いつか別稿で。ともかく妙にウマが合うので、22年間、時々会って酒を飲み、放談している。

この日はいつもの禁煙席が空いておらず、

テーブルが二席の喫煙ルームに案内された。

それが、ドラマのような不思議な時間の始まりだった。

上品な家族連れ

ウナギの塩焼きなどを肴に杯を重ねること
2時間、二人はすっかり出来上がってしまった。
4合の焼酎ボトルが、もう空になりそう
だ。「そろそろ、帰るか」と立ちかけた時、
3人連れの男女が隣のテーブルに着席した。

上品な白髪混じりの紳士、少し年下の婦人、
そして聡明そうな若い女性。つまり、それな
りに豊かな家族連れと見受けられた。

その3人は、着席するなり、ともに沈黙し
たまま実に旨そうに煙草を吸った。



「皆さん、タバコが本当にお好き
のようですね」。何と、Hさんが、
突然その家族に語りかけた。普段、
隣のテーブルに語りかけることなどないHさ
んにしては珍しい。「私は、今はほとんど吸
わないですが、昔は大好きだったんです。皆

さんを見て、つい吸いたくなりましたよ」。

その家族は、微笑んで会釈した。

その後、娘さんは冷酒の入ったグラスを、これも本当に旨そうに飲みほした。その飲みっぷりの良さに、「一本、差し入れさせてください」と、今度は私が語りかけた。

「日本酒、お好きなんですか？」「そうですね。パリに留学しているので、日本に帰るとつい飲みたくなるんですよ」と娘さん。やっぱり、セレブなご家庭らしい。

一変した雰囲気

「あの、お二人は何のお仕事をなさっているんですか？」と、夫人が唐突に私たちに語りかけてきた。「私は経営コンサルで、お向かいの方は元銀行員です」と、私は答えた。

その時だった、その夫人の表情が一変したのは。「私たちは、信頼していた人に最近裏切られ、会社と財産をすべて失ってしまったんです。」「えっ・・・？」「主人が、実印や会社印、預金通帳などを、経理担当者に一切

預けてあったのが原因でした」。

「ご主人、本当ですか？」「情けないですが、本当です・・・」。細面の紳士は、消え入り
そんな声で、力なく肯定した。

何と言う場面だろうか！普通に言って、初
対面で、いきなり蕎麦屋で交わすような会話
ではない。また、財産を失ったというのに、
なぜユツタリ食事をしているのだろうか・・・。

「私は、力を失った両親に代わり、だまし
た相手と戦うために帰国しました。今日は、
その作戦会議なんです」と娘さん。

「何か妙案はないでしょうか？」と
夫人が畳み掛ける。「初めてお会い



した私が、酒の場で軽々とお答えできる話題
ではありません。ともかく、娘さんを中心に、
冷静に対処してください。突破口は必ず見つ
かりますよ！」。私は、これだけやっと答え、

後味の悪さを引きずりながらその場を辞した。

「もし、私の地元の方だったら、もっと温
かい対処をしただろう・・・」と。